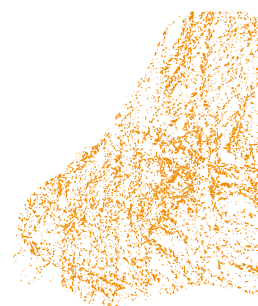
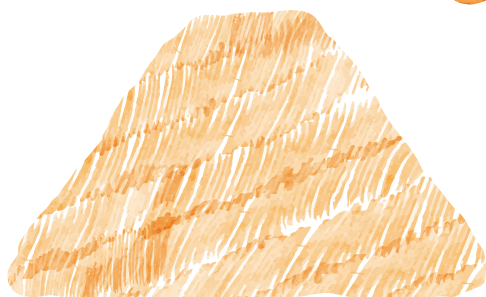
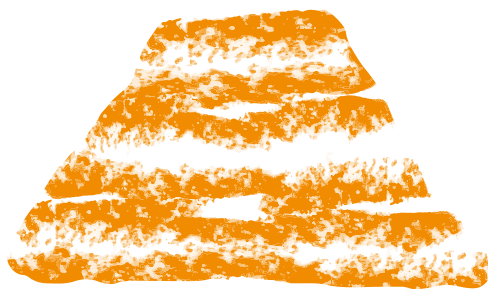
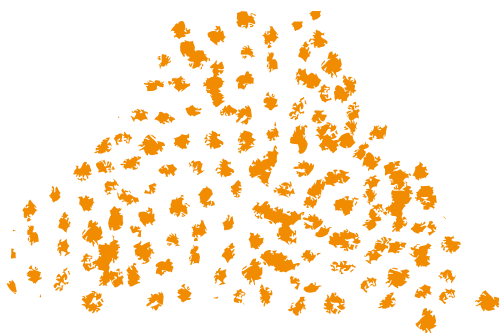
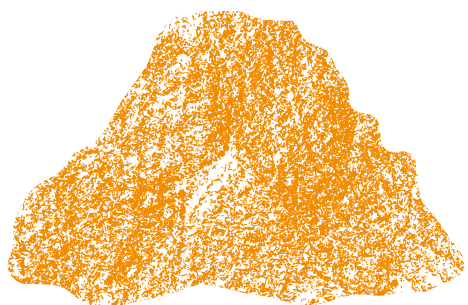
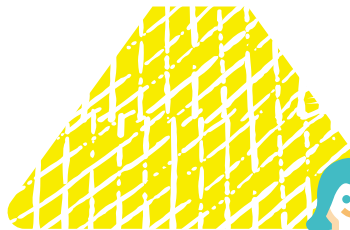


アーツカウンシルしずおか  
ARTS COUNCIL SHIZUOKA





# 視点をかえる 発想をひらく

アーツカウンシルしずおかは、「視点をかえる発想をひらく」をキャッチフレーズに、住民が主体となって展開するアートプロジェクトへの支援を中心として、社会における文化芸術の活用を推進する組織です。

「みんなが表現者」になることを目指して、本来、誰もが持っている創造性が社会のなかでいきいきと発揮されるよう、まちづくり、観光、福祉、ビジネスなど、社会の様々な場面でイノベーションが生まれる、創造的な地域づくりに貢献します。

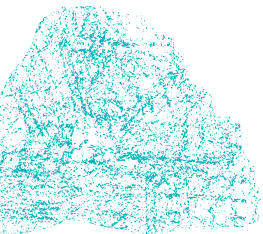
## アートプロジェクトとは？

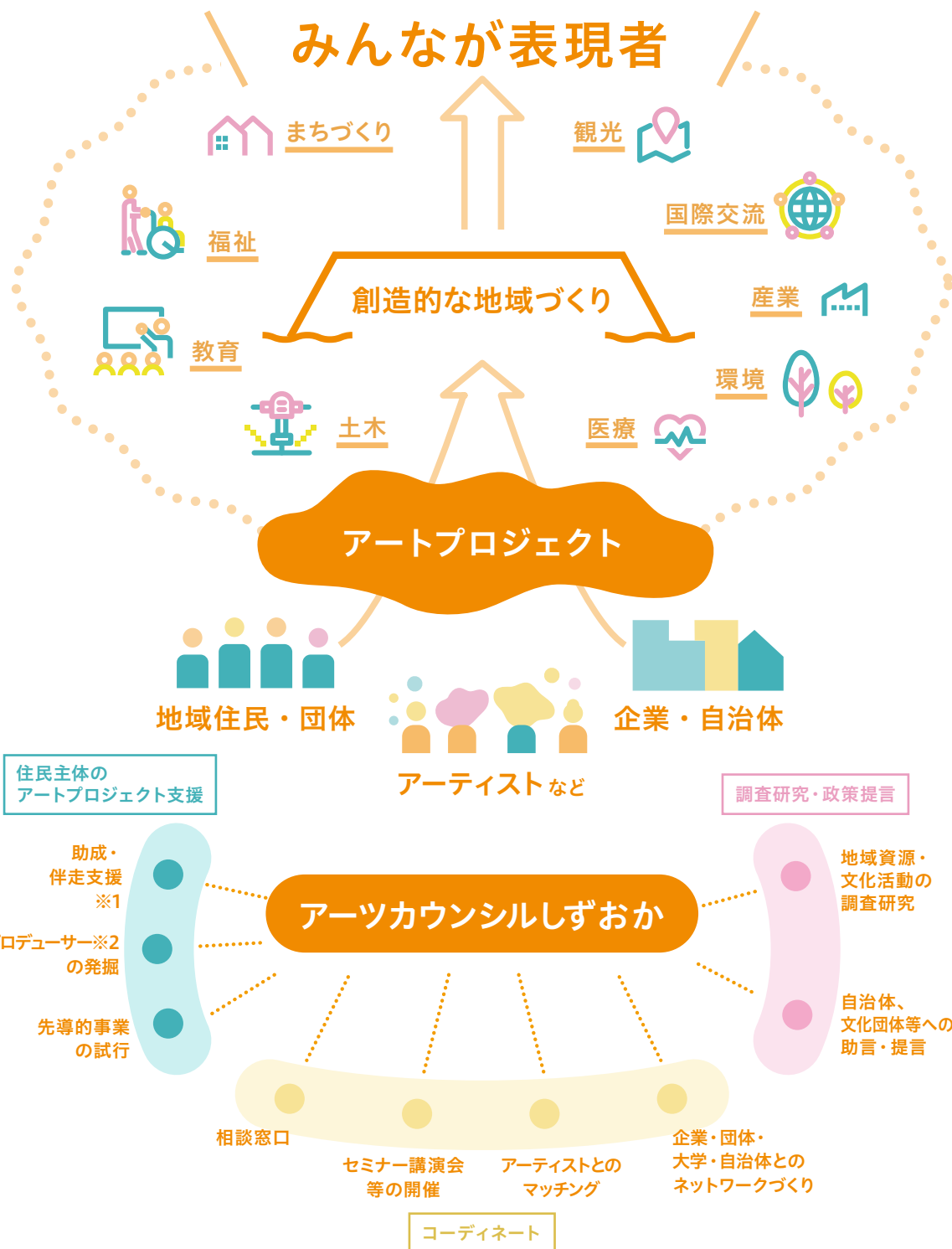
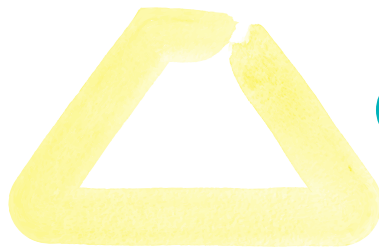
**みんなでわいわいガヤガヤ、あーでもないこーでもないと進める未来づくりです。**

アートプロジェクトは、住民の知恵とアーティストの視点を掛け合わせ、新しい発想を地域にもたらします。その大きな特徴として「プロセスを重視すること」が挙げられます。例えば「みんなで試行錯誤する」ことを選んだ場合には、企画の実現だけでなく、コミュニティの発展につながったり、関わった人たちの自己効力感が高まったりします。関わり方や進め方、事後フォローといったプロセスの仕立て方によって、さまざまな効果が生み出されます。どんな発想でも受け入れられるというアートの寛容さを力に展開するアートプロジェクトの現場では、人が集い、誰もがアイデアを出し、役割を持ち、つながる、そのような場がなぜか立ち上がります。そして地域や分野を越えた連携に発展し、様々な可能性の種を産み落とす。それがアートプロジェクトの一番の醍醐味です。

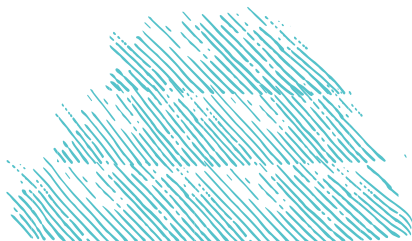
## なぜ、アートなのでしょう？

試行錯誤が不可欠であり、「人と違っているからこそ素晴らしい」というアートの価値観は、固定化した考えや状況を転換する可能性を秘めています。アーティストの視点によって気づきがあったり、新たな発想が生まれたり、アートは体験した人の内面に作用します。私たちが促進するアートプロジェクトは人の関わりを重視しており、その体験は誰もが持つ創造性を刺激します。それは、住民によって地域の様々な場面でアップデートやイノベーションが誘発されるための大切な要素です。





※1 助成金による支援と共に、プログラム・ディレクター、コーディネーターによる助言や事業内容の整理などの伴走支援を行います。  
 ※2 社会の様々な分野に軸足を置き、地域に根ざしたアートプロジェクトを推進する人や団体を指す、アーツカウンシルしずおかの造語。



# 「すべての県民がつくり手」 創造性に輝く地域社会の形成

野の花を摘んでありあわせの器に生ける。正月飾りから始まって、様々な年中行事が続く。あるいは、子どもたちが絵を描きながら何やら適当な歌を歌って、やがて踊りだす。こうした生活の中に根付いたささやかな表現行為を、私たちは芸術文化の源と考えています。

専門家だけが表現活動をするわけではないのです。むしろ、だれもが子どものころは多様な表現活動をしたはずで、また、大人になっても、衣食住の中に彩りを考え、生活の節目節目に飾りつけや行事を行ってきたのです。

こうした表現行為がさらに発展したものとして、郷土芸能やお祭りがあります。お祭りの大きな特色は、本来外から来る見物人をほとんど想定せず、地域の人々が、総出で協力し合って維持してきたところにあります。すべての人がつくり手でもあり、自ら楽しむものです。そこでは、すべてを自分たちで取り仕切る自治こそが重要です。

けれども、近代から現代にかけての芸術文化のあり様は、専門の教育や訓練を受けたつくり手を芸術家やアーティストとして評価する一方、多くの人々を鑑賞者として作り手からは分離し、芸術文化が一部の人の特別なものであるという誤解を生みました。

こうした芸術文化を、私たちの生活の中に取り戻し、お祭りのようなだれもがつくり手にもなり、楽しめる形に戻したいというのが、私たちの願いです。

近年、地域の人々が共同して、地域の特色を生かして、様々な表現活動を組み込んだ、住民主体の活動が数多く誕生してきました。こうしたアートプロジェクトと呼ばれる、文字通り新しい祭りが誕生してきているのです。

アートプロジェクトには、子どもから高齢者までだれでもが参加できるのが特色です。少子高齢社会の課題に取り組み、障害のある方や高齢者の表現活動をも高く評価しています。空き家や産業遺産、さらには廃墟にも価値を見出し、地場企業のブランド形成にも取り組んでいます。

アートプロジェクトが多数生まれてきていることは、静岡県の誇りです。しかし、まだまだすべての県民が参加するまでには、長い道のりがあるでしょう。プロジェクト間のネットワークにより、さらに多くの方が、こうした活動に参画されることを願っています。

## 加藤 種男 Kato Taneo

アーツカウンシルしずおか アーツカウンシル長（公益財団法人静岡県文化財団副理事長）



アートプロジェクトのネットワーク化を掲げ、企業、行政、公益団体などを横断して文化政策を推進。芸術文化を専門家の独占から解放し、コミュニティの再生と新たな社会創造への源泉ととらえ、個人の表現にとどまらない、市民主体のプロジェクト型の協働表現を、祝祭芸術と名付けて展開している。企業メセナを長らく担当し、あわせて、アート NPO の全国ネットワークの形成、横浜をはじめとする文化芸術創造都市の推進、東日本大震災の芸術文化による復興支援などにかかわってきた。京都造形芸術大学客員教授、東京都歴史文化財団エグゼクティブアドバイザーなどを歴任。著書『芸術文化の投資効果』『祝祭芸術』など。芸術選奨文部科学大臣賞受賞。

文化芸術と社会を結ぶアートマネジメントの専門家 /

## プログラム・ディレクター／プログラム・コーディネーター

5名の専門スタッフが、助成制度を活用したアートプロジェクト実施団体の伴走支援を行っています。あわせて、文化芸術をはじめ、まちづくり、観光、福祉、教育、産業など幅広い分野のご相談に対応しています。また、それぞれの専門性を生かし、各種事業の審査員や講演会・研修等への登壇なども行っています。



チーフ プログラム・ディレクター

### 櫛野 展正 Kushino Nobumasa

福祉施設勤務を経て、2016年に独立し、アウトサイダー・アート専門スペース「クシノテラス」を開設。鞆の津ミュージアム等でキュレーターを歴任。総務省主催「令和3年度ふるさとづくり大賞」にて総務大臣賞受賞。京都芸術大学院（MFA）修了。



プログラム・ディレクター

### 鈴木 一郎太 Suzuki Ichirota

ロンドンでアーティストとして活動後、NPO 法人クリエイティブサポートレッツで障害と社会をつなぐ事業に携わる。2013年の独立後は、主体者の思いから展望を見出す企画づくりを軸に、様々な分野の事業に関わる。Central St. Martin's College of Art and Design MA Fine Art 修了。



プログラム・コーディネーター

### 立石 沙織 Tateishi Saori

静岡文化芸術大学にてアートマネジメントを専攻後、ギャラリーやNPO等で、アーティストの支援やアートによるまちづくりに従事。展覧会やアートプロジェクト、アーティスト・イン・レジデンスの企画運営、広報を担当する。



アシスタント・コーディネーター

### 若菜 ひとみ Wakana Hitomi

自治体職員として若手芸術家の支援やミュージアムの企画運営など文化振興業務に従事。フラッシュ・モブ・ハプニング主宰。コミュニティラジオの映画番組の立ち上げ、番組運営に携わる。2011年より社会人劇団の制作を担当。



アシスタント・コーディネーター

### 樋口 加奈 Higuchi Kana

静岡大学地域創造学環アート&マネジメントコースにて、地域課題の実践に取り組む。日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS や「東京ビエンナーレ」など全国規模のアートプロジェクトを経験し、文化芸術と地域・他分野をつなぐ活動に従事。



## 相談窓口のご案内

アーツカウンシルしずおかでは、アートプロジェクトの主催者やアーティスト、拠点の運営者、企業、自治体の方等を対象とした無料相談窓口を開設しています。

文化芸術に関わる取り組みを中心に、企画運営の悩みから、法律や経理などの実務面まで、様々なご相談に対応しています。また、文化の分野にとどまらず、ビジネスや行政などの現場においても、課題に対して創造的な視点からのアイデアをご提案しています。

どなたでもお気軽にご相談ください。

詳細・ご予約は  
こちらから



アーツカウンシルしずおか  
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

(公益財団法人静岡県文化財団内)

〒422-8019 静岡市駿河区東静岡二丁目3番1号 グランシップ1F

☎ 054-204-0059 📠 054-288-8180

✉ info@artscouncil-shizuoka.jp

🌐 <https://artscouncil-shizuoka.jp>

📱 @artshizuoka

Website

